

持参薬鑑別業務からわかる 患者の薬剤管理の現状

山口県 徳山医師会病院 薬局

**○古谷 宏実、有馬 治男、吉永 哲史、伊ヶ崎 芳美
久野 ひとみ、渡邊 なつ美、西村 正広**

当院の特徴

全国で唯一の完全オープン型の病院

当院は、周南市の病院・診療所の医師が登録医として、患者の入院から退院までの間、一貫して診療するシステムである。

かかりつけ医（ホームドクター）として外来から入院、退院後外来と一人の患者を一貫して診ることが出来る最適のシステムである。

また入院中は、主治医だけではなく、常勤医、他科の医師、山口大学等のコンサルタント医と共同し診療している。

【緒言】

当院はオープンシステムのため、ほとんどの患者が他院の薬を持参して入院してくる。

当院では、全ての入院患者の持参薬を鑑別している。鑑別時にお薬手帳があることで、薬品名・用法用量不明の薬が少なくなり、他院や調剤薬局へ問い合わせをする手間が省ける。

これまで、入院患者にお薬手帳を持参してもらったための取り組みをいくつか行ってきた。

そこで、現在の入院患者のお薬手帳持参率と、それによる薬剤鑑別の状況について調査したので報告する。

〈これまでの取り組み〉

- H19.11に山口県薬剤師会において『お薬手帳利用促進キャンペーン』が実施された。H20.4から後期高齢者制度が施行されることもあり、当院ではお薬手帳を持っていない患者へ手帳を配布し活用の必要性を説明した。このときのお薬手帳持参率は約**18%**であった。
- H20.11から入院患者へ配布される『入院案内』へ服用中の薬と共にお薬手帳を持参するように促す文章を加えてもらった。その後、H21.1に調査した結果、お薬手帳持参率は**35%**に増加していた。
- H21.11.22～11.28山口県薬剤師会において『お薬手帳利用促進キャンペーン』が再び実施され、CM放送、当院ではポスター掲示・パンフレット配布を行った。

お薬手帳万のお守り

「お薬手帳は持ちですか」。薬局で、そんな言葉を耳にしたことはありませんか。医師が処方した薬の名称や効能などを記録したもので、いわば自分が服用している「薬歴」のこと。薬の重複や副作用などがチェックでき、患者に勧める薬局が県内でも増えていきます。現状を取材してみました。(成沢解語)

伸びぬ携帯 意識改革課

周南市の70代女性は、薬局の勧めで数年前からお薬手帳を持つようになった。脳梗塞、心筋梗塞、糖尿病、せんそんを患い、処方薬を複数飲んでいる。手帳には「バイアスピリン」「パナルジン」と印字したシールが張ってあった。いずれも心筋梗塞の薬で、血を固まりにくくする効果がある。

「お薬手帳を示すことで、初めて診察してもらった医師にも、服用している薬が分かると、飲み合わせの悪い薬や重複する作用のある薬を処方しないよう防げることができる。」

ただ、こうした薬を服用しているとき、手術の際に傷口から血が止まらなくなる恐れがある。女性は以前、出血を伴う歯の治療を受けた際、歯科医から薬の服用の有無を聞かれなかったという。この時はいずれの薬も服用していなかった。

お薬手帳を示すことで、初めて診察してもらった医師にも、服用している薬が分かると、飲み合わせの悪い薬や重複する作用のある薬を処方しないよう防げることができる。

最近では、お薬手帳の持参を呼びかけている病院が多い。女性が入院している徳山医師会病院(周南市慶万町)も1年半ほど前から、患者に手帳の持参を促す取り組みを始めた。病院が手帳の持参状況を1カ月間調べたところ、当初は外来患者の94%が持参せず、入院患者では69%が持参していないと回答。持参した人、家にあると回答した人はいずれも11%だった。

その後、4カ月にわたって

外来患者348人、559人に手帳の有無を調査した。その結果、初回は初回の受診で5回目の受診では上がった。だが一方で、持参は初回の調査だが、その後は上がった。手帳配布後、患者の持参も23%、退院後には41%に上がった。持参しない理由は「面倒くさい」が37%と最多で、次は「忘れる」が26%、さらに「聞いてない」の15%と続いた。しかし、例えば大災害があった時、自分が服用している薬が散逸してしまったり、どうなるのか。95年の阪神・淡路大震災。現地には多くの医師が入ったが、高齢者が服用している薬が何なのか分からないケースが続出。徳山医師会病院の薬剤師も現地入りしたが、薬の特定に時間が

投薬の重複や副作用事故を防止

くらしを見つめて
医療・福祉



お薬手帳の持参を呼びかける文書を受付で掲げていた。周南市慶万町

H21.6.11朝日新聞に紹介されました。

【今回の調査方法】

・調査対象

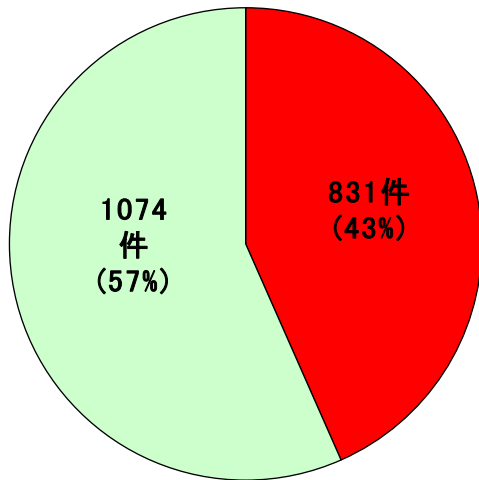
H22.7.1～H23.7.31(13ヶ月間)の間に入
院された患者

・調査内容

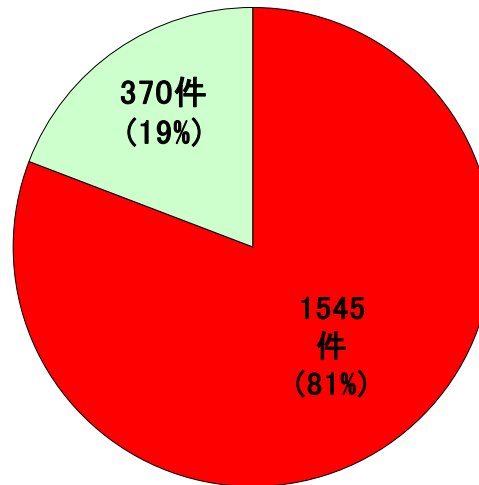
持参薬鑑別時にお薬手帳と薬袋及び薬情
の持参の有無、薬品名・用法用量不明の有
無を調べる

【結果①】

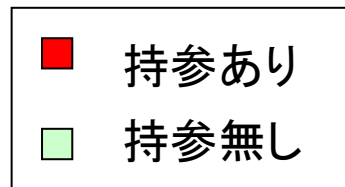
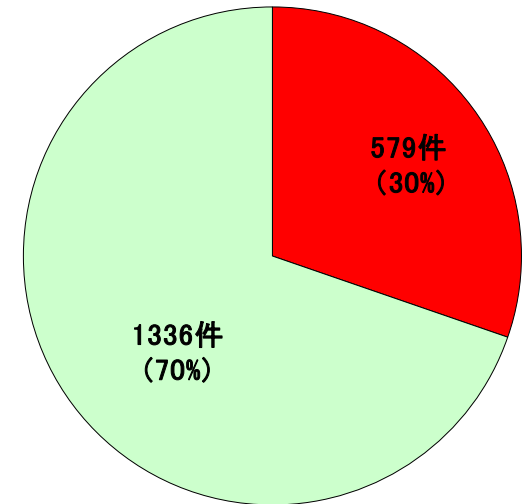
・お薬手帳の持参状況



・薬袋の持参状況



・薬情の持参状況

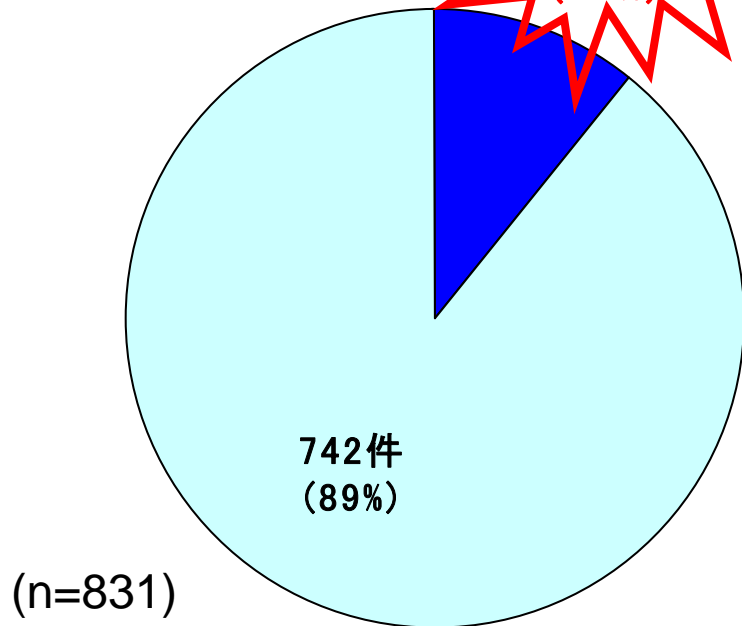


(n=1915)

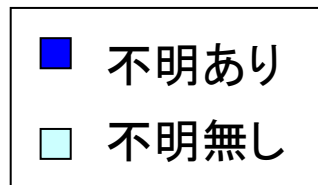
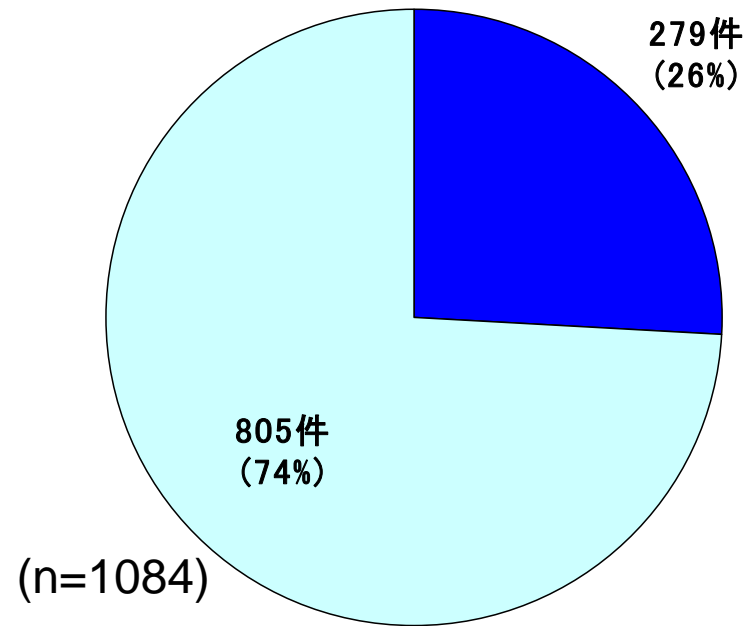
【結果②】

薬品名・用法用量不明の件数の比較

手帳持参あり



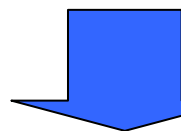
手帳持参なし



【注目した点】

→ お薬手帳を持参した中にも薬品名・用法用量不明が約11%あった

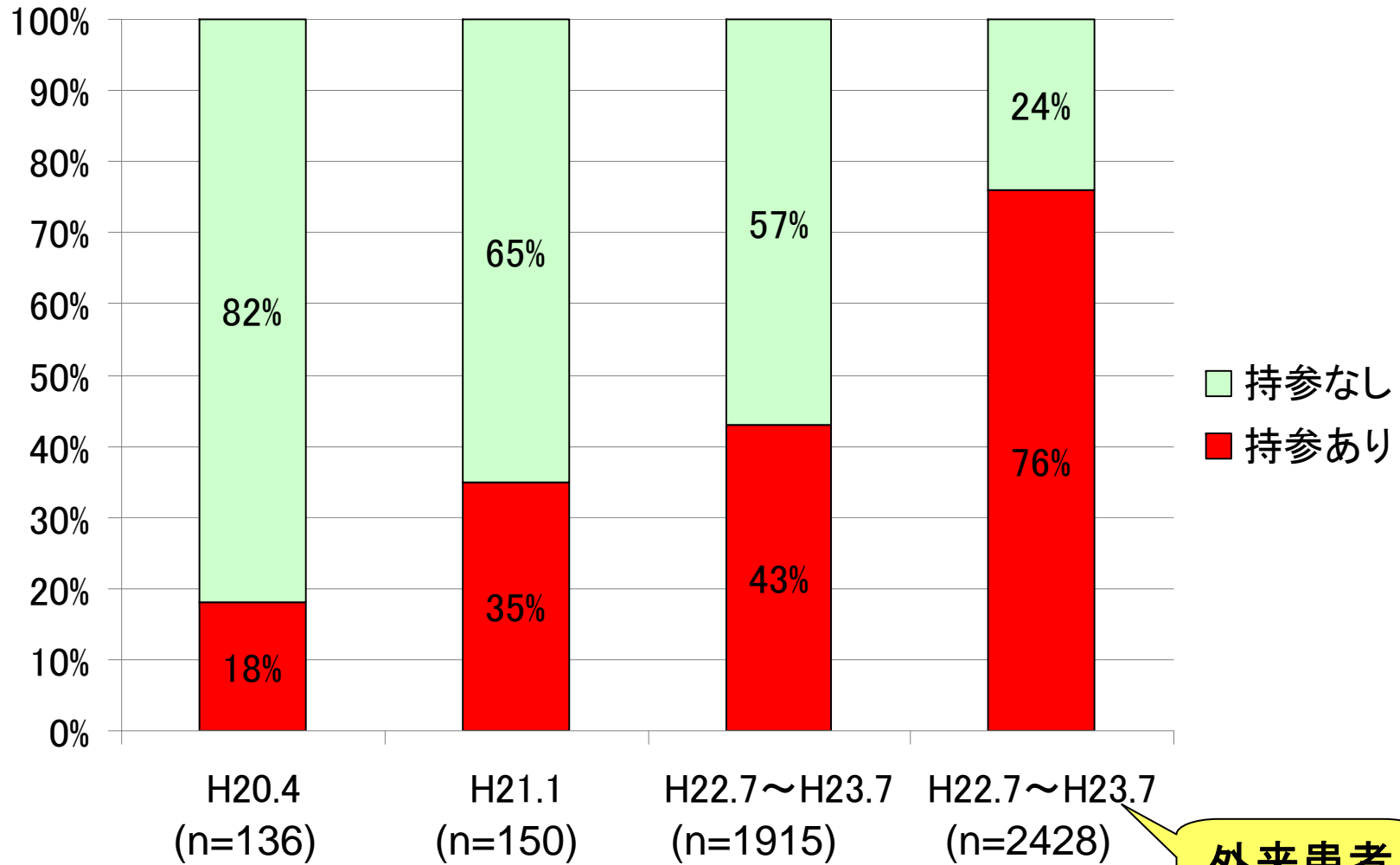
最新の情報が記載されていない



考えられる理由

- ・院内処方病院・診療所ではお薬手帳を渡していないことが多い。また、シールを渡すのみで手帳に貼られていない場合もある
- ・複数のお薬手帳を病院・診療所ごとに使い分けている
- ・前回と同じ処方が続く場合、シールを断る患者がいる
- ・『入院案内』にお薬手帳を持参するように記載されているので使っていない手帳を単に持ってきただけの患者がいる

お薬手帳持参率の比較



【考察・課題】

お薬手帳の持参率は未だに50%を切り、予想よりもかなり低かった。また、前回の調査からお薬手帳持参率はほとんど増えなかった。外来患者の持参率が76%と高いにも関わらず入院患者の持参率が低いと言うことは、入院する際にお薬手帳は必要ないと思っている患者が多いと予想される。

薬袋の持参率は約80%と高いが、患者自身が分かりやすい様に中身を入れ替えていることがあり、用法不明が多かった。

散薬の用量は薬袋や薬情に記載されていないことが多く、問い合わせをすることがあった。お薬手帳も薬情も無

い場合は薬品名が分からなかった。

お薬手帳が正しく活用されていればこのような問題は解決されると思われる。

正しい使い方を周知させ、お薬手帳を更に普及させるには、調剤薬局との連携が必要だと思う。今回の結果で、今後さらなる薬薬連携を深めることが大切だと感じた。

また、今回調査する中で院内処方の病院・診療所はあまり積極的にはお薬手帳に記入していないように感じた。特に薬剤師不在の診療所では医師にお薬手帳の重要性を知ってもらう必要がある。今後どのように医師へ浸透させていくかが課題と言える。

そして、お薬手帳を持っていない患者への手帳配布・説明はこれからも継続していこうと思う。